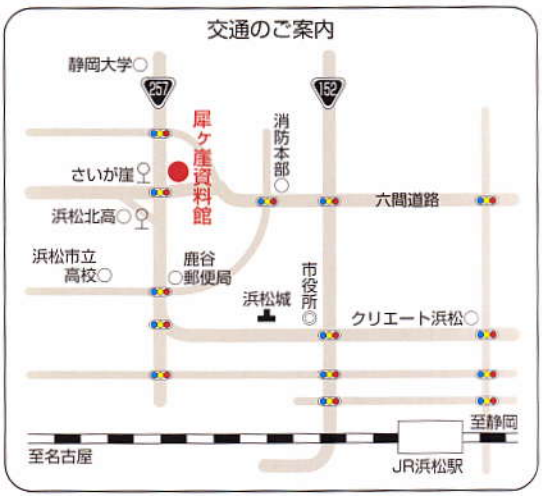
三方ヶ原古戦場犀ヶ崖

犀ヶ崖資料館のご案内

■開館時間／9:00～17:00
■休 館 日／毎週月曜日
（月曜日が祝日の場合は翌日）
12月29日～1月3日
■観 覧 料／無料

交通のご案内



■遠鉄バス浜松駅前バスターミナル
① 番ポール発の全てのバス「浜松北高」下車
⑮ 番ポール発の全てのバス「さいが崖」下車

お問い合わせ
犀ヶ崖資料館
〒432-8014 浜松市中区鹿谷町25番10号
Tel・Fax 053-472-8383

VEGETABLE OIL INK
環境に配慮した植物油インキを使用しています。
R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています。

三方原古戦場犀ヶ崖と遠州大念仏

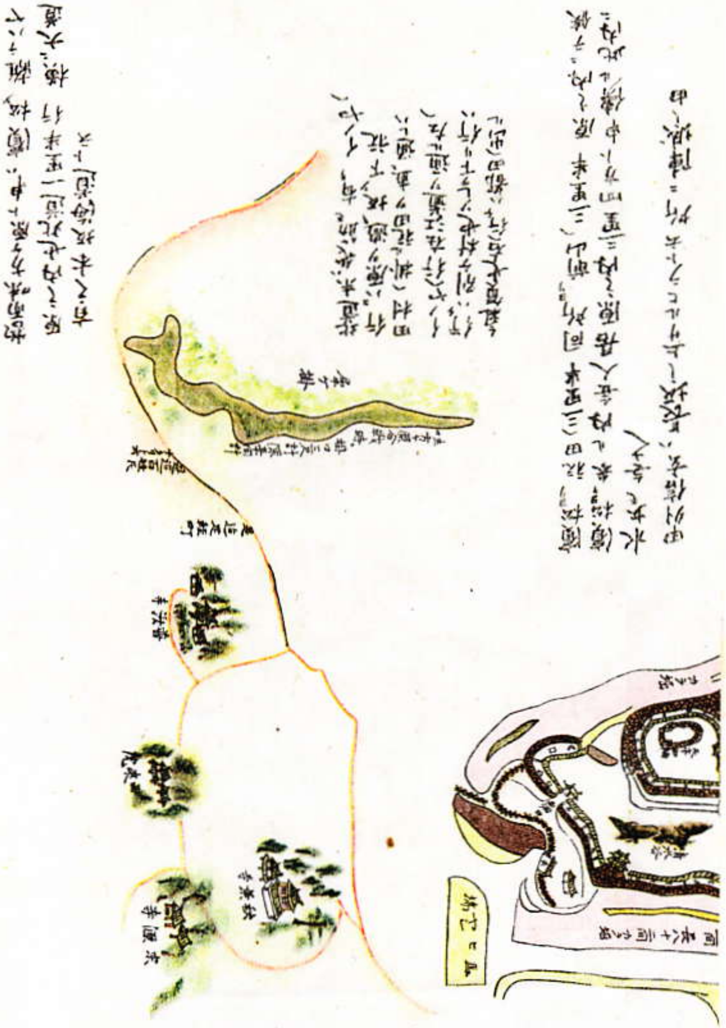
犀ヶ崖資料館

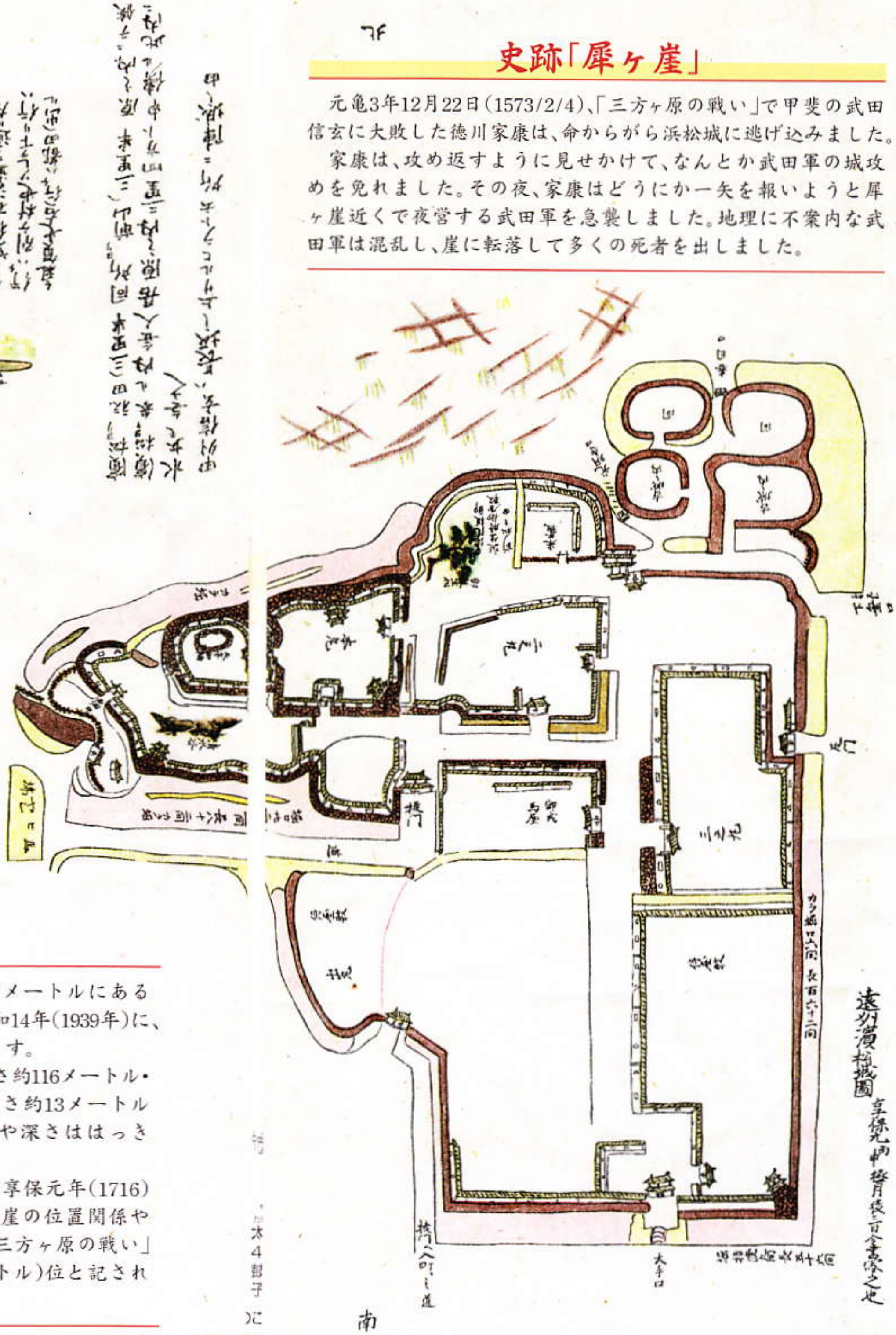
浜松市

史跡「犀ヶ崖」

元亀3年12月22日(1573/2/4)、「三方ヶ原の戦い」で甲斐の武田信玄に大敗した徳川家康は、命からがら浜松城に逃げ込みました。

家康は、攻め返すように見せかけて、なんとか武田軍の城攻めを免れました。その夜、家康はどうにか一矢を報いようと犀ヶ崖近くで夜営する武田軍を急襲しました。地理に不案内な武田軍は混乱し、崖に転落して多くの死者を出しました。





犀ヶ崖は浜松城の北側約1キロメートルにある断崖で、三方ヶ原古戦場として昭和14年(1939年)に、静岡県の史跡に指定されております。

史跡の現況(60年3月現在)は、長さ約116メートル・幅約29メートル～34メートル・深さ約13メートルです。しかし、当時の崖の大きさや深さははっきりと分かりません。

この古地図は、江戸時代中期の享保元年(1716)に記されたもので、浜松城と犀ヶ崖の位置関係や崖の形状、大きさが分かります。「三方ヶ原の戦い」当時の崖の深さは五十間(90メートル)位と記されています。

犀ヶ崖資料館

犀ヶ崖資料館は、「三方ヶ原の戦い」による死者の霊をまつった宗円堂というお堂でした。また、昭和5年(1930年)に結成された「遠州大念仏団」の本部としても、ながく利用されてきました。

浜松市は、昭和47年(1972年)3月に遠州大念仏を無形民俗文化財に指定するとともに、昭和57年(1982年)には、この建物を資料館として改修し、遠州大念仏及び三方ヶ原の戦いに関する資料を展示することにしました。

この資料館は、郷土に伝わる文化遺産を後世に残していくことを目的としています。

犀ヶ崖伝説

三方ヶ原の戦いの時、徳川軍は崖に布の橋をかけて、この崖に武田軍を追い落としたという伝説が後に生まれ、それが布橋という地名の由来にもなりました。

このような伝説は普済寺(広沢町)・龍泉寺(半田山)・安寧寺(雄踏町山崎)などに伝えられています。

また、「遠江古跡図絵」《享和3年(1803)》(現代文)には『(前略)浜松の町裏二十町程隔て名栗町、その町家の裏に崖がある。昔は深かったが、近来段々浅くなり今は深さ五、六間、長さ三町余、幅八間余である。(中略)布橋の故事は妄説なり、崖の端に幕を張り、向こう岸に提灯を多く置き陣所のように見せかけ、武田の騎馬隊が幕の中に乗り入れようとしたところ、次々に崖下に転落させ(後略)』とあります。

「遠江国風土記伝」《寛政11年(1799)》の中では次のように記しています。(現代文)

『犀ヶ崖は名残にあり、城の西十六町ばかり、曳馬野の陥溝なり。長さは約五百歩、幅約二十歩余。樹木が生い茂り、崖の中は暗くて深さは見当がつかない。古老の話によると、なが雨で風が烈しい時、佐伊という獣が出て、その跡がみぞ陥にとなる、故に佐伊かけと言う(後略)』とあります。

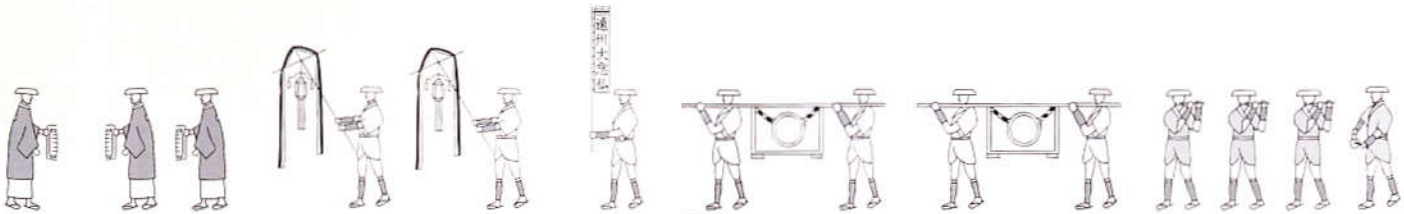
「曳馬拾遺」《正徳3年(1712)》によると、『長雨降り殊更風雨烈しく山鳴りする夜、人々はこの崖を見出し怪しい様子にて深さ計り知れず、さいという獣が此処から出て海に入る、その跡がこの崖になった。されどこの獣を定かに見た人は居ない。』と記されています。

井上靖の詩集「北国『カマイタチ』」の中では、「(前略)今でも樹木鬱蒼とした深い谷で、橋の上からのぞくと、谷底にはいつも僅かな溜まり水が落ち葉をひたしていた。ここは日暮時にカマイタチが出るというので皆から怖れられていた。カマイタチの姿を見たものはない。(後略)」と述べています。

資料館の周辺には三方ヶ原の戦いにいわれのある石碑があります。家康の身代わりとなって討ち死にした夏目吉信の碑や、殿(しんがり)を務め壮絶な討ち死にした本多忠真の碑が、犀ヶ崖を凝視するように凄然と立ちつくしています。

本多忠真の顕彰碑

本多忠真は徳川四天王の一人、本多忠勝の叔父にあたる武将。三方ヶ原で大敗した徳川軍の撤退に際し、殿(しんがり)隊を買って出た忠勝隊の中にあって、武田勢の中に刀一本で斬り込み、39歳をもってこの地で討死した。



引手
施主の依頼を受けて家までの案内をする。

頭先
三ツ葉葵の紋付き羽織を着て、組を誘導する。

頭
「ひんどろう」ともいう。

幟
武将の旗指物をかたどったもので、組の標識としている。

双盤
2個の鉦を並べて、布を細かく切って束ねた撞木で打つと、それぞれの音が調和して独自の音を発する。

笛
6穴の横笛で、笛の音に合わせて行進、施主の家へ入場する。

摺鉦
小さな鉦の

夏目吉信の顕彰碑

三方ヶ原の戦いで討死した武将のうち、もっとも知られているのが夏目次郎左衛門吉信である。彼は敗走中の家康の身代わりとなり、「我こそは家康なり」といって、犀ヶ崖付近で武田勢の前に立ちふさがり討死した。

犀ヶ崖のたたり

「三方ヶ原の戦い」の翌々年頃より、夜更けになると犀ヶ崖の谷底から人や馬のうめき声が聞こえ、付近で怪我人が続出したり、イナゴの大群が発生して農作物に害を与えたりしたため、人々はこれは犀ヶ崖の戦死者の「たたり」と恐れられるようになりました。

そこで家康は、三河から了傳(りょうでん)という僧侶をまねいて、了傳が七日七夜、鉦と太鼓を鳴らして供養したところ、「たたり」は鎮まったと云われています。

以後徳川家康は、三葉葵の紋付羽織を着ることを許し、念仏踊りを奨励しました。そして、了傳の後を継いだ宗円(そうえん)がさらに布教に努めたため、遠州各地で大念仏が盛んに行われるようになりました。

大島蓼太(りょうた)の句碑

「岩角に 兜くだけて 椿かな」大島蓼太は、江戸時代中期の俳人で、天明の五俳人の一人といわれた人。全国を行脚する途中、浜松に立寄った。句碑の後方には椿の木が植えられていて、句を詠んだ情景を偲ぶことができる。

大念仏回向(えこう)

遠州大念仏保存会が結成されるまでは、「浜松大念仏」・「犀ヶ崖念仏」とも呼ばれていた。

遠州大念仏

「遠州大念仏」は、遠州地方の郷土芸能の一つで、初盆を迎えた家から依頼されますと、その家を訪れて庭先で大念仏が行われます。大念仏の団体は、必ずその家の手前で隊列を組み、下の図のように、統率責任者の頭先の提灯を先頭にして、笛・太鼓・鉦の音に合わせて行進します。笛・太鼓・鉦・歌い手、そのほかもろもろの役を含めると30人を超す団体となります。

大念仏の一行が初盆の庭先に入ると、太鼓を中心にして、その後方に双盤を置いて、音頭取りに合わせて念仏や歌枕(うたまくら)を唱和します。そして、太鼓を勇ましく踊るようにして打ち鳴らし、初盆の家の供養を行います。

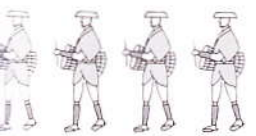
江戸時代のもっとも盛んな時には、約280の村々で大念仏が行われていました。

現在、約70の組が遠州大念仏保存会に所属し活動しています。

なお、犀ヶ崖では、毎年7月15日に三方ヶ原合戦の死者の霊を慰めるため、遠州大念仏が行われています。

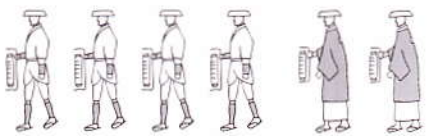
●参考文献
・神谷　昌志「浜松古跡図絵」、「浜松歴史散歩」他
・渥美　静一
・渥美　實　「土の色」
・渡瀬茂三郎
・名古屋市蓬左文庫「遠州濱松城図」

その他遠州大念仏保存会の皆様よりご教示をいただきました。



鼓
個1組で用い、遠州大念仏では太を打つことを「きる」という。8拍と16拍子がある。

とて、主として笛と共に行進の時に打ち鳴らす。



供回り(ともまわ)
行列の形をそろえて、回向の歌い手となる。

押し(お)
道中行進の秩序を整える。

遠州大念仏の行列　昭和12年頃宗円堂(資料館)前